

中川米造「医学概論」講義

浜松市・十字の園診療所 後藤 幸一

キーワード：

医学概論 medical philosophy

医学教育 medical education

医学史 medical history

(1) 医学概論はパリ生まれ？

私は昭和42年（1967年）大阪大学医学部入学で、中川米造先生（当時、助教授）の医学概論講義を昭和44年11月に受講した。

奇しくも、その時に筆記した大学ノートを保存しキープしている。今回シンポジウムの「医療の原点を振り返る」というセクションにおいては、この自分の講義ノートを振り返りつつ“医学概論から原点を考える”という報告を行なうこととした。

本報告文ではシンポジウムの報告に基づいて歴史的いきさつや講義ノートの一部紹介をも交えながらすすめて述べて行きたいと思う。まず、日本ではじめての医学概論という講義が生まれた源流はどこからなのか、いつからなのであったのか、から考えはじめなければならないだろう。

手元に昭和16年（太平洋戦争が始まった年）3月6日開催の阪大医学部教授会の資料がある。タイトルは、『学科課程改革委員会案趣旨』となっている。ガリ版、A3版、10枚に亘るものである。

その文中に「次に述べるが如き内容を有する医学概論なる科目を先づ追加せんとする意義が存する。」とあり、この時に学科としての用語が初めて登場したの

ではないかと考えられる。

それよりさかのぼって、昭和の初期にパリ留学中の阪大生理学教室の久保秀雄氏（昭和2年卒業、のちに教授とられる）と、京都大学からのフランス哲学でデカルト専攻の澤瀉（おもだか）久敬氏（昭和4年卒業）が「阪大に医哲学，医学概論を」という話で盛り上がったという伝聞がある。従って、「医学概論」はパリ生まれで、育ちは大阪ということが言えるのではないだろうか。

(2) 中川 講義

大学3年生で中川講義を受けたのは、学園紛争の最中でストライキがあり、じつに半年おくれで医学専門課程に教養部から進級してその直後であった。

阪大医学部の4階，階段教室，水曜日の第1時限目であった。寒い朝であった。そう出席者も多くない中で，教室のやや中空をみあげるようにして教壇に両手を突きながら話される長髪，長身の中川助教授はどこか芸術的な雰囲気もただよっていて，とてもカッコいいなあと感じた。

しかし3回目，つまり1970年（昭和45年）1月14日（水）になると，教室内の出席者は減りに減り，まばらになっていた。学生の3分の1か，よくても2分の1が出席していたらいい方ではなかったかと思う。閑散としていた。

1月の朝，中川先生は堺市に住んでおられた頃であろうから，南海電車，地下鉄と乗りついて来ておられたのではないかと思う。学生としては，テストがあるわけでもないし，レポートもいないし，という考えもあったのではないか。

しかし個人的にはあるが，当時学園紛争でストライキにはいり，闘争派，ノンポリ派，スト破り派と，入り乱れたあとであって——これからの人生（医師人生）を真剣に問おうとしていた自分にとっては，「この先生，何を言っているのか，よくわからないが」，「きっと大切なことをしゃべっているのではないか。」そう直感していたようだ。——「点数には結びつかないけれど，案外こういうことの中にこそ（今のストライキも含めての）本当の問題を解くカギがあるのではないか」。朝ががんばって起きて「出席しよう」，そう思ったことは確実に記憶する。

「阪大医学部で「医学概論」という講義が行われていることが注目されるよう

になったのは和田心臓移植（1968）などで「医の倫理」や「医の哲学」が問われるようになったところからではないか。”と、野村拓氏は、『医学史研究』（第90号，2008）のなかで述べられている。

“そして医師養成教育は技術的教育に偏り，倫理的，哲学的なものが欠落しているからではないか，という文脈の下で「医学概論」に目が向けられるようになったと思われる。”と書いておられる。

ちょうど自分たちの講義のころはその時期に該当すると思われる。

(3) 戦中と戦後の「医学概論」

文頭で述べたバリ生まれの伝聞やエピソードがあって戦中に生まれたこの講座であるが，その誕生のいきさつの文書として教授会資料を一部分コピーして本シンポジウムのレジュメとして配布した。

それを検証すると（むしろ当時，戦中という時代背景を考えると当然ではあろうが），われわれが聴講した約20年後の姿と対比させた時，その「医学概論」講義たるものの変貌におどろかざるをえない。つまり昭和16年と昭和44年の段差と言い換えてもよいだろう。

皮肉にも軍靴の音，とどろかんとするなかに医学部カリキュラムの戦時的改編というべきなかで，医学概論は生まれることになった。

教授会資料の書き出しは，(一) 学科課程改革の必要，とあり「科学に関する国家的関心は最近特に甚だ強く，且つ著しく広げられて来た。医学に於ても醫學徒，並に醫師は単に個人生活に於て活動するのみでなく，社会生活，立法，教育等，人文的方面に深く且つ汎く合一関与することが必要となるに至った。」とある。

そして「斯くして学問意識に燃える若い学生の科学する心を其の専攻学科の哲学的根底の上に確立させる道を講ずることは見逃すことの出来ぬ大學への新しい課題の一つである。」とある。

さらに人文科学的刺戟の比較的淡い大阪大学においてこそ，特に其の重要さがあるのであって，学科課程改革の始めとして「医学概論なる科目を先づ追加せんとする意義が存する。」という文脈で，日本で初めて「医学概論」という用語が

登場している。

次は戦後に走りすぎた技術至上主義への批判の急先鋒としての攻撃役への変貌という中味の好対照さである。

昭和16年、医学部教授会からはおそらく生まれそうもない哲学的表現がみられるのは、澤瀉久敬氏の関与があったと考えられる。

実際、澤瀉氏は阪大文学部に教授としてその年に赴任され、籍を置きながら医学部での講義を担当され、後継者、中川米造氏が専任講師として昭和29年に赴任されるまでの環境づくりに努力されたことと思われる。

(4) 出されなかった手紙

本シンポジウムは、追悼という趣旨であったので、中川先生を偲んで『医学史研究会』として保管してある昭和35年に当時の医学部長に書いた「書簡草案」を紹介することにした。

「暑中御見舞申しあげます。

既に御存知かとは存じますが小生医学部において「医学概論」を担当させて頂いております。この科目乃至特に小生に対し御好感を持たれていない由で、既に澤瀉教授も御話しに参上した事ではありますが、小生といたしましても一言辯解申し上げたく、直接お目にかかるには、先生御多忙のために困難と存じますので書面を以て申し上げます。」

この書き出しで始まる草案は、当時の西沢医学部長（小児科教授）の風当たりに対する弁明書のようなものであった。

間の悪いことに、中川講師は医学部長室の向かいにある衛生学教室の図書館を借りた形で研究をしていたので医学部長は、臨床教授が医局員を見るような目線を中川講師に注ぎ、それを公式、非公式に非難されていたようだ。文中、中川先生が赴任するまでのいきさつが述べられてある。

「小生、昭和24年京大卒業後、京大耳鼻科に入局致しました。学生の頃より

医学の理論的構成に疑念を持ち、其の方面の著書や論文を読んだり、自ら思索を試みたり致しておりました。そのころ阪大に澤瀉教授が「医学概論」なる講義をなされていると聞き、同志と語って京大にも同じ講義がなされるよう奔走しました。澤瀉教授と小生との関係は従いまして昭和22年来の師弟関係であります。」

その後、耳鼻科入局後の研究である『身体手術生理』や『眩暈論』に触れられている。

「昭和29年には米国シンシナチ大学よりの招きで留学が決定し、帰国後某大学の助教授として赴任が内定致しておりました。

この時、阪大より医学概論専任として来てはという御意向が澤瀉教授を通じてありました。右せんか左せんかにつきましては大変迷いましたが、将来、それが正式の教室になるという御話もあり、又世界にも類例のない教室だと考え、このために一生を捨ててもよいと考えた末、阪大に参りました。」

医学部長の非難に関しては次のように逐条的に答える形がとられている。

☆「小生に対する御不満の一つには、在校時間の問題があるように承けたまわりましたが」仕事の性質上むしろ自宅で研修した方が能率の上ること、他校、他学部での講義や演習があり、あちこち資料の調査に出かけることもあり、やむをえない面があること。

☆「今一つの御不満は、小生がアルバイトをしていることの様にうけたまわりました。これにつきましては特に厳格な態度で臨まれるとか。」

しかしアルバイトは夜間3時間程、友人の診療所を手伝うだけで、勤務時間には支障がないこと。さらに奥さんが肺結核で入院されるという事態が重なったことや京大出身の先生にはアルバイトのルートが少ないことを述べ、医学概論に対する大学の研究費は年間3万円で、これでは必要な洋書が買えないこと、などである。

この「書簡草案」は200字原稿用紙22枚に及ぶものであったが、結局、医学部長には送られなかった。

(5) 力を貯えた頃

「草案」は次のようにすすむ。

「このように申しましたが、それでは、研究費を増額して戴ければアルバイトを止めると申すつもりではありません。小生の俸給にせよ、又研究費にせよ国民の税金であります。未だはっきりと自信をもって、この医学概論が国民のためになるといえない現在、そのような要求は掲げようとは存じません。唯専任の講師として戴いているだけで幸福だと思ひ、又少なくともそれだけの意義は認められるという責任の自覚で精一ぱいであります。

同封の「全国医学校医学概論講義状況の調査」にもあります如く、各医学校で医学概論の講義が行われておりますが、専任講師のあるところは、当大阪大学だけであります。その特色を生かし、なんとかこれを育てる責任は自覚しておりますが、浅学菲才よく其の任に耐えるかどうか、小生自身に甚だ疑いとするところであります。自分の能力の範囲内で秘かにコツコツと積み上げて、退官までに纏め上げていささかでも阪大及び日本の医学のためになるものをと願っております。」

「阪大に参りました折は、将来教室にするからという御話でしたが、実際に専門家としての修行を始めてみますと、それは仲々に大変なものであることも判って参り、専任講師として通す方が責任が軽いことも知れてきました。澤瀉教授は教室創設に熱心でありますが、小生としましては、それには余り関心がありません。唯講師として、このまゝの生活を送れることが願ひであります。この上希望を述べる事が許されますならば、研究費を多少とも増額して戴くこと、つまり、必要図書を校費で購入して置いておきたいことでもあります、勿論これは絶対的な願ひではありません。」

このような緊張関係がつづく中で、1961年（昭和36年）に発足した『医学史研究会』で、中川氏は水を得た魚のような活動を開始されることになる。赴任後の閉塞的状況が、かえって問題意識を高める結果となり、新しい分野における起動

力になっていたのではないかと考えられた。

(6) むすびにかえて

以上の意図、動機でシンポジウムでは中川氏の医学概論にかける“志”を中心に述べてみた。この目的のために“出されなかった手紙”にも力点をおいて報告を行なった。

中川氏の謙虚な学問への思い、学問の為に全生涯を投げ出すのも惜しまない力強さが伝わってくるのではないかと思った。

彼の動機、目的意識をまず汲み取ることが追悼の意味なのではないかと考えた。そこから原点も振り返られるべきであろう。

シンポジウムではこの労苦の時代に中川氏のまとめられた澤瀉教授開講二十周年記念『医学概論文献目録』[欧文篇] (B 5 版, 30頁, 1960年1月発行) の一部紹介も行った。これは中川氏の『医学の弁明』(誠信書房, 1964年発行) の巻末にも掲載されている。

この文献目録は、1959年9月28日に衛生学丸山博教授に贈られたものであった。単行書だけ数えてみて、254冊あった。フランス語、ドイツ語が大部分である。読みこなされる氏の博学に敬意を送るべきであろう。

シンポジウムでは、「医学概論講義要旨」(1959年, 大阪市立大学) の一部も紹介した。

この要旨は私自身が黒板から書きとったものでもあり、その講義録を「受講記」として『医学史研究』にその1, その2, その3と現在執筆中である。

私はただの講義室の人海のひとりにすぎないわけであるが、先生からの薫陶を受けた者のひとりとして、また医学史研究会の会員として追悼の場でプレゼンテーションをさせていただいたわけであった。

当日発表後、フロアから自分のところへ、「わたしは中川先生が耳鼻科のアルバイト時代(昭和34年)、中学2年生で先生の診察を受けていました。」という婦人が来られたことを記しておきたい。偶然、シンポジウムに参加されていたが、草案の文面を聞かれて、驚かれたらしい。

また滋賀医大附属図書館の菅修一氏からはシンポジウム後、中川先生が執筆された「医学教育論」(1)から(7)まで(阪大医学部学生自治会・医学教育研究委員会1966年発行『医学教育』より)を送って頂いた。深く感謝の意を表する次第である。